

# 米欧亜回覧

第82号  
発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

## シンポジウムに向けて合同討議を行う ～四月十七日の総会例会

本年度の総会全体例会は、四月十七日、日比谷図書文化館の五階ホールで開催された。その後、予定されていた五百旗頭真氏の講演が事情で延期されたため、二十周年記念グラウンドシンポジウムについての討議が行われた。

会は塚本弘実行委員長の司会で始まり、最初に泉三郎代表より全体のテーマと構成について、続いて第一日目、第二日目、第三日目の内容について、担当の小野博正委員、山田哲司委



年次総会 (4月17日・日比谷図書文化館)

員、そして塚本弘委員より詳しい説明があり、質疑応答と意見交換を行った。

泉氏よりはメインテーマである「岩倉使節団の世界史的意義」や「地球時代における日本の未来像」、サブテーマの「明治創業世代の志を体して」の意味することについての説明があった。

続いて小野氏から第一日目のテーマである「岩倉使節団の群像―明治日本に何をもたらしたか―その光と影に学ぶ」の趣旨説明があり、扱う人物リストとその発表担当者の披露があり、盛りだくさんの内容だけにどう構成し、プレゼンテーションにも工夫が必要との認識が示された。

次に山田氏より第二日目のテーマである「日本近代百五十年の成功と失敗を考える」の趣旨説明並びに招聘講師と当会メンバーの発表内容についての報告があった。この研究会はすでに一年以上続けられてお

り三十名近い人物を扱って来た経緯があり、論点も多く、これどうまとめたいかについての苦心と決意が語られた。

最後には塚本氏より第三日目のテーマである「世界の中の日本役割」や「日本の未来像」に関する趣旨並びに招聘講師や議論の組み立ての構想についての説明があった。壮大なテーマであるだけに、どう具体的にプログラム化していくかが当面の課題だとの報告があった。

次いで質疑応答にはいろいろ様々な質問意見が出て、時間いっぱい熱心な議論が交わされた。

### 各界の講師を招いて 本セミナーも進行中...

外部講師を招いての本セミナーも各分野で左記のように進行している。

グローバルジャパン研究会では、二月に福川伸次氏(東洋大学理事長)、三月に和田昭允氏(東京大学名誉教授)、五月に川口加奈氏(NPOホームドア理事長)、六月に関健志氏(日本ナショナルトラスト協会事務局長)。

歴史部会では五月にウイリアム・スチール氏(国際基督教大学教授)、六月に奥平康人氏(静岡文化芸術大学教授)。

近代代史研究会では、五月に瀧井一博氏(国際日本文化研究センター教授)

「失われた二十年」という言葉がまるで事実であるかのように使われている。自然に下を向いてしまっている。海外移転、地方の過疎化、非正規雇傭の蔓延、所得格差の拡大、千兆円の債務、少子高齢化、家庭や教育の崩壊とくれば、誰もそんなマインナスの気持ちにならざるを得ない。が、物事には陰陽があり、明暗がある。発想を転換してみれば、そこには明るい光の面があることを想起すべきだと思う。

### あらまほしき成熟社会へ 新しい芽吹き！

泉三郎

吹いている新しい営みに注目してみよう！そこではすでに十年も二十年前から、新時代にふさわしい思想で実践活動を行っている人々がいる。たとえば、幸福の要件「食・住・仕事・絆」を、寄る辺なきホームレスに提供している菩薩のような若き女性、水力・風力・バイオの発電を地域で複合的に実現させてしまった辣腕の女傑、高齢者も児童も障害者もすべて受け入れてくれる慈母のようなご婦人。むろん凄腕の男性もあちこちに存在する。山村で街中で、農林漁業による雇傭の創出や老人介護や幼少年の教育に、志ある活動家は澎湃として誕生しつつあるのだ。

思えば日本はいまもなお「豊かで便利な生活」を享受できている、しかも世界が羨むような「平和で自由」な日々を送れている。それに、成長の後には成熟が来、青年から壮年へ壮年から老年へは当たり前の成り行きである。先に挙げたマインナス面も多くは先進国に共通の現象であり日本だけの問題ではない。我々の国にいま求められているのは、「量より質」、「物より心」、「成長よりバランス」であり、「美や品格や道義」であることを知るべきだと思ふ。

目を洗って列島各地で芽吹いている新しい営みに注目してみよう！そこではすでに十年も二十年前から、新時代にふさわしい思想で実践活動を行っている人々がいる。たとえば、幸福の要件「食・住・仕事・絆」を、寄る辺なきホームレスに提供している菩薩のような若き女性、水力・風力・バイオの発電を地域で複合的に実現させてしまった辣腕の女傑、高齢者も児童も障害者もすべて受け入れてくれる慈母のようなご婦人。むろん凄腕の男性もあちこちに存在する。山村で街中で、農林漁業による雇傭の創出や老人介護や幼少年の教育に、志ある活動家は澎湃として誕生しつつあるのだ。

第79回 全体例会

年次総会を終えて  
いよいよ記念事業モードへ

四月十七日(日)、日比谷図書文化館の五階ホールにおいて、定例の年次総会(第一部)が開催され、大雨・強風の悪天候にもかかわらず多くの会員が参加した。第二部は、予定していた五百旗頭真氏の講演が延期となり、設立二十周年記念事業・グランドシンポジウムの実行計画と討議が行われた。



総会で挨拶する泉代表

まず、泉三郎代表の挨拶があり、設立二十周年記念事業に向けた一年間の経過が説明され、会員の寄付金や財団への寄付申請の報告があった。続いて、議長選定、定足数の確認、議事録署名人の選定の手続きのあと、近藤義彦議長

の進行で第一部が開始された。議題である、平成二十七年年度会計収支報告(四頁掲載) および平成二十八年年度予算案が承認され、事務所住所変更や、地方会員、準会員および学生会員を正会員の二と

して明記するなどの定款変更が承認された。ついで、四名の理事の重任と監事の選任が承認され、幹事十六名と顧問四名が紹介された。

最後に、平成二十七年年度活動報告(三頁掲載)をもとに、第二部で計画が討議される歴史部会・A(小野博正氏)、近代史研究会・B(山田哲司氏)とグローバルジャパン研究会・C(塚本弘氏、

島山朔男氏)を除く以下の部会報告が行われた。実記を読む会(小坂田國雄氏)、英訳実記を読む会・アーネストサトウA Diplomat in Japan 読書会(岩崎洋三氏)、メディア広報委員会(中山進氏)、Cafe-music & Lecture(植木園子氏、岩崎洋三氏)、関西支部(難波康熙氏)。

第二部：グランドシンポジウムの説明と全体討議

はじめにグランドシンポジウムのメインテーマや趣意についての説明や議論があり、次いで第一日目、第二日目、第三日目を担当する各部会のテーマや発表内容について現段階の計画案や詳細が伝えられた。また、そのテーマに相応しい外部講演者や内部発表者の候補等が挙げられた。

グランドシンポジウムの成功に向けて  
実行委員長塚本弘

いよいよ、シンポジウムまで、あと五ヶ月を切りました。A、B、Cそれぞれのグループの議論も、外部講師を迎えるなど、拍車がかかってきました。三日間で、明治、大正、昭和、平成の「光と影」を明らかにし、さらには、今後、百年の計を考えるという、「平成の岩倉使節団」のような素晴らしいシンポジウムにしたいものです。

確かに、今の日本には、ある種の閉塞感があります。幕末の日本、あるいは、多くの開発途上国に比べれば、はるかに恵まれています。また、閉塞感を打ち破る、各地の試みの実例があります。岩倉使節団の米欧亜訪問の大きな目的は、近代化に関する膨大な情報を如何に日本の未来の発展に繋げていくかという一点にあったと思えます。十二月のグランドシンポジウムも、内外の専門家の方々を交え、我々メンバーが、こうした岩倉使節団の



年次総会の進行は近藤義彦事務局長

となり会員の母校等への広報も視野に入れるべきとの意見もでた。

また、プログラムやチラシの作成、当日の弁当の手配、事後の報告書作成のための記録や出版計画のことまでが話題になり、全員がシンポジウムの全体像をイメージでき、会員の共通認識が醸成され、それぞれが何をしなければならぬかを意識できたことはとても有意義であった。

(文責) 古俣 美樹



記念事業の説明と討議 塚本弘実行委員長(右) 山田哲司顧問(左)

「志」を踏まえ、この百五十年の歩みを振り返るとともに、世界とともに今後の日本の未来をどう築き上げるか、大いに論じ合う場としたいと思います。よろしくご協力をお願いいたします。

☆新会員自己紹介☆

新たに会員となった方々の自己紹介です。

向後 宏行

十数年前から、進行性の神経難病に罹患しており、発音が不明瞭また歩行が自由にならないので東京まで出かけるのがひと苦労です。現在は千葉県銚子市に住んでいます。かつては、東京にある外資系の会計事務所にも長らく勤務していました。私の関心事は、「日本型」民主主義の理解にあります。岩倉使節団のメンバーには、「五箇条の御誓文」への共通認識があったはずで、「権力者」ではなく、権威をもつ者としての天皇に興味があります。

米欧亜回覧の会 平成27年度(2015年度)活動報告

	全体例会	実記を読む会	英訳実記を読む会	歴史部会
平成27年 4月	第75回例会(4/26) NPO会員年次総会 『20周年記念事業企画案討議会』 於 一橋講堂	4/9 第89~90巻 『ヨーロッパ州政治・社会総論』『同 地理と輸送総論』 大森東亜氏	★Sir Ernest Satow, A Diplomat in Japan 輪読会 4/15 『Ch.13 Ratification on the Treaties by the Mikado』 成田八郎氏	4/20 『思想家石橋湛山〜「日本」の思想的意味』 小松優香氏
5月		5/14 第91~93巻 『ヨーロッパ州気候と農業総論』『同 鉱・工業総論』 『同 商業総論』 小坂田園雄氏	5/20 『Ch.14 Great Fire at Yokohama』 市川三世史氏	5/18 『明治維新をめぐる幕府たち』 西井易穂氏
6月		6/11 第94巻 『地中海の旅』 山崎厚子氏	6/17 『Ch.15 Visit to Kagoshima and Uwajima』 齊藤恵子氏	6/16 『岩倉使節団の實した成果(光と影)を考える』 小野博正氏
7月	第76回例会(7/26) 芳賀徹氏『岩倉使節団と米欧回覧実記』 於 一橋講堂	7/9 第95~96巻 『紅海の旅』『アラビア海の旅』 堀江興氏	7/15 『Ch.16 First Visit to Ozaka』 岩崎洋三氏	7/21 『明治国家形成における井上毅の事績』 大久保啓次郎氏
8月		(夏休み)	(夏休み)	(夏休み)
9月		9/10 第97巻 『セイロン島の記』 岩崎洋三氏	9/15 『Ch.17 Reception of Foreign Ministers by the Tycoon』 小坂田園雄氏	9/14 『近代医学への道と長寿専攻』西井易穂氏 9/28 『金子堅太郎「広輪外交」の先頭に立ち日本の転機を身を以て知る』吹田尚一氏
10月		10/8 第98巻 『ベンガル湾の旅』 芳野健二氏	10/21 『Ch.18 Overland from Ozaka to Yedo』 小泉勝海氏	10/19 『大久保利通が考えたこの国のかたち』大平忠氏 10/20 『薩摩藩の英米・米留留學生』 吉原重和氏&村井智恵氏
11月	第77回例会(11/15) 保阪正康氏『現代の課題を大正時代の歴史から考える』 於 一橋講堂	11/12 第99巻 『シナ海の旅』 小野博正氏	11/18 『Ch.19 Social Intercourse with Japanese Officials-Visit to Niigata, Sado Gold Mines and Nanao』 永島信一郎氏	11/16 『明治の文部行政と田中不二麿』 大森東亜氏
12月		12/10 第100巻 『香港及び上海の記』 泉三郎氏 兼忘年会@さかみ	12/17 『Ch.20 Nanao and Ozaka Overland』 榎原知子氏	12/14 『岩倉使節団の一つの成果〜日本の教育制度誕生への道筋に結びつけた欧米での教育関係の調査経緯を新島研究資料から探る』多田直彦氏
平成28年 1月	第78回例会(1/9) 新年会 「肖像写真と音楽で出逢う地球を元気にする人々」 於 日本外国特派員協会	【第200回】 1/14 第1~2巻 『太平洋の旅』『アメリカ合衆国探視』 小坂田園雄氏	1/13 『Ch.21 Ozaka and Tokushima』 齊藤恵子氏	1/18 『岩倉使節団人物列伝を書き終えて〜宗教(神道・仏教・キリスト教、儒教の攻防)からみた明治維新』 小野博正氏
2月		2/11 第3~4巻 『サンフランシスコ市の記上』『サンフランシスコ市の記下』 芳野健二氏	2/17 『Ch.22 Tosa and Nagasaki』 大森東亜氏	2/15 『フルベッキ〜モリソン号事件からフルベッキ来日まで〜日本の開国に関わった外国人』 岩崎洋三氏
3月		3/10 第5~7巻 『カリフォルニア鉄道の旅』『ネヴァダとユタの記』『ロッキー鉄道の旅』 大森東亜氏	3/16 『Ch.23 Downfall of the Shogunate』 水谷剛氏	3/7 『木戸孝允〜憲法制定の歴史を振り返る』 芳野健二氏 3/22 『岩倉使節団同行の6人の女子留學生』 島山朝男氏

	近代史研究会	グローバル・ジャパン 研究会	広報メディア委員会・ 企画委員会	i-Café	関西支部
平成27年 4月		4/11 『日本の難局をどう乗り切るか〜国内課題と対外関係』 吹田尚一氏	4/15 会報79号	4/19 i-Café-lecture@ 浦安市民プラザ	4/25 実記輪読: 第3巻(フランス) 時事討論: 中国の東・南シナ海進出と旧ドイツの ラインラント問題
5月	5/16 『横井小楠』 泉三郎氏 5/31 『岩倉具視』 山田哲司氏	5/9 『科学とメルヘン〜宇宙開発からナノテクノロジーまで』 ゆうき・よしなり氏		5/10 i-Café music@ 菅志野リンデンバウム 5/24 i-Café-music@ シェア奥沢II 米国編1	
6月	6/8 『伊藤博文』 泉三郎氏 6/17 『福沢諭吉』 山田哲司氏 6/22 『夏目漱石』 持田綱一郎氏 6/29 『中江兆民』 半澤健市氏	6/13 『逞しい若者を育てるために』 大平忠氏			
7月	7/3 『山縣有朋』 井出亜夫氏 7/12 『岡倉天心』 小松優香氏 7/19 『岩崎家3代』 森本淳之氏 7/29 『浪沢栄一』 井出亜夫氏	7/11 『今後の進め方・取り上げたいテーマ・プレゼンター等について』『日本の進路(安保法案問題含む)』 塚本弘氏	7/10 会報79号	7/19 i-Café-music@シェア奥沢II 米国編2	7/8 実記輪読: 第3巻(フランス) 時事討論: キリシヤ債務問題とドイツの欧州経済支配
8月	(夏休み)	(夏休み)		8/2 i-Café番外編@シェア奥沢 『へえ、アングラってこんなところだったんだ!〜現地テレビで見える生活実態』 在アングラ日本大使 伊藤和明氏	
9月	9/20 『明治維新の総括』 9/28 『西園寺公望』 泉三郎氏	9/12 『米欧亜回覧の会20周年行事に参加に向けて』		9/20 i-Café-music@シェア奥沢II 英国編	9/2 実記輪読: 第3巻(フランス)
10月	10/3 『原敬』 山田哲司氏 10/16 『吉野作造』 半澤健市氏 10/23 『与謝野晶子』 持田綱一郎氏 10/30 『1920~30年代日本はどうして曲がっていったのか』 吹田尚一氏	10/17 『世界平和を目指す〜「九条」を活かし世界から戦争をなくす』 平和とは...『安全保障問題・国際交流・日本の役割』 塚本弘氏	10/30 会報80号		
11月	11/30 『島崎藤村』 持田綱一郎氏	11/29 『幸福とは、福祉社会とは?〜民の幸福を目指す〜万民がよく生きられる条件をつくる』 泉三郎氏	ホームページの リニューアル作業 開始	11/1 i-Café-music@シェア奥沢II フランス編	11/11 西井易穂氏講演 『我が国の近代医学への道と長寿専攻』
12月	12/4 『小林一三』 輪波康照氏 12/8 『大正デモクラシーと社会主義思想家を辿る』 井出亜夫氏 12/21 『近衛文相と昭和十年代』 吹田尚一氏	12/12 『日本を元気にするには?』 小泉勝海氏 『大震災に被災した気仙沼市を目指す地方創生戦略』 島山朝男氏 『地方創生を通じ、世界のモデル国としての日本を如何に 築き上げるか?』 塚本弘氏		12/5 i-Café & 中浜万次郎の会コラボ企画『映像と音楽でたどる岩倉使節団・米国編〜岩倉使節団が見たアメリカ』	12/17 実記輪読: 第3巻(フランス) 時事討論: 普仏戦争でプロシヤの勝利が日本の 国創りに与えた影響
平成28年 1月	1/26 『吉田茂』 泉三郎氏 1/30 『石橋湛山(昭和編)』 小松優香氏	(休会)		1/24 i-Café-music@シェア奥沢II ドイツ・オーストリア編	
2月	2/8 『下村治と高度経済成長』 吹田尚一氏 2/17 『高橋達之助と企業の社会的責任』 井出亜夫氏 2/22 『黒澤明〜20世紀を代表する映像作家』 半澤健市氏 2/29 『大平正房とその政治理想』 山田哲司氏	2/13 『日本が目指す社会像〜大平構想を踏まえて〜』 福川伸次氏			2/17 『伊藤博文による明治憲法の制定の過程』 時事討論: 2016年の10大リスクと2020年までの 3大リスク
3月	3/4 『松下幸之助と戦後の資本主義』 森本敦之氏 3/10 『小林秀雄〜近代の逆説』 持田綱一郎氏 3/16 『昭和重臣の総括と今後の展望について』	3/19 『科学技術とはなにか? 生命はなぜ不思議か? そして文明はどこへ行くのだろうか?』 和田昭允氏	3/5 会報81号	3/27 i-Café-music@シェア奥沢II ロシア編	3/23 実記輪読: 第3巻(フランス)

平成27年度(2015年度)会計収支報告 (単位:円)

収入の部

平成27年4月1日から  
平成28年3月31日まで

特定非営利活動法人 米欧亜回覧の会

入会金	60,000
(12名+準会員13名+学生1名)	
年会費	606,000
寄付金	1,307,000
講演会等事業収入	1,260,579
その他(受取利子)	56
<b>当期収入合計</b>	<b>3,233,635</b>

支出の部

当期収支バランス

1,104,355

期首現金・預金残高	301,589
当期収支バランス	1,104,355
期末現金・預金残高	1,405,944
(内訳)	
手許現金(事務局合計)	(362,393)
郵便貯金	(1,043,551)

講演会等事業費	1,117,412
会報発行印刷代	210,315
郵送費・託送費	188,373
電話・通信費	26,280
会議費	107,539
事務用品費	121,361
事務委託費	358,000
<b>当期支出合計</b>	<b>2,129,280</b>

近代史研究会の活動報告(三月〜六月)

前号ニュース(八十一号)以降の活動状況について報告する。まず、会員による「人物論」セミナーシリーズでは、三月四日、「松下幸之助と戦前・戦後の資本主義日本」森本淳之氏、三月十日、「小林秀雄の近代」持田鋼一郎氏、四月二十六日「北一輝いま戦前右翼を論ずる意味は何か」半澤健市氏、「画期(一九二〇〜三〇年代)における国家形成とその破綻」吹田尚一氏、五月十日、「山本七平の近代」持田鋼一郎氏、「トヨタ経営と豊田家」森本淳之氏、以上六シリーズが開催された。今後は七月二十八日「満州国と二・二六事件」古海建一氏、香田忠雄氏(既報)が予定されており、本シリーズはこれを以て終了する。本シリーズは一般会員も自由に参加でき、毎回、数名から十名を越す出席者がある。

また、近代史研究会幹事による本シリーズの総括・討論会も、三月十六日、四月二日の二回行われ、シンポ第二目の企画・運営の具体案が検討された。

内部勉強会としての「人物論」シリーズと並行して、新年度より、シンポ当日の企画と連動した本セミナーが始

まった。第一回目として、五月十七日(火)十三時〜十七時、国際文化会館において、瀧井一博・国際日本文化センター教授により「文明史的遺産としての明治―衆知のための国家―」と題して講演会(参加者は一般会員を含め二十数名)が行われた。講演は、

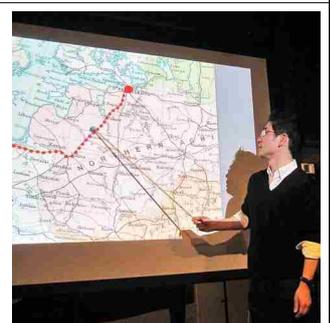
- ①「失われた二十年」と日本文明への視座
- ②日本文明論の現状
- ③知識国家としての日本
- ④「知識国家論」の歴史的系譜
- ⑤テキストとしての伊藤博文以上、五つの論点から明治以降現在に至る歴史を概観し、明治国家を文明的遺産として現代の視座より論じられたもので、シンポ第二目の論点整理に大変有効な示唆をいただいた。なお、瀧井先生にはシンポ第二日に、コメントータとしてご登壇いただく予定になっている。

次回(第二回目)は、七月十二日(火)十三時より、国際文化会館四〇一号室にて、成田龍一・日本女子大学教授による「日本近代における『大正時代』の意義」(既報)、また、第三回として、中島岳志・日本工業大学教授(九月予定)を企画中である。

(山田哲司)



ニキータ山下氏  
(3月27日・シェア奥沢)



森田健太郎氏  
(3月27日・シェア奥沢)

「Cafe-music@シェア奥沢」(三月二十七日ロシア編)  
日比谷図書文化館特別研究室ナビゲーター森田健太郎氏を第一部の講師にお招きした。同氏は大学院まで歴史を学び、岩倉使節団馴染みの久米美術館の学芸員も勤めた事もある専門家、含蓄のあるお話をご披露いただいた。第二部ミニ・コンサートには、かつてロイヤルナイツのベ이스として海外も含む数多くのコンサートで人気を博したニキータ山下さんと、西川会員がメンバーのダンディー・フォーをお招きして「ロシアの草原」、「赤いサラファアン」等ロシア民謡をたっぷり聞かせていただいた。最後に



i-café-lecture 5月31日  
(日比谷図書文化館)

二キータさんを囲んで「i-Cafe-Singers」を含む全員で「1700しび」等を合唱できたのは幸いだった。

〔五月二十二日イタリヤ編〕

第一部の講師には、会員でイラストラレーターのゆうきよしなり氏をお招きした。昨年ポローニヤで開催された国際児童図書展に参加し、ファイルンツェやクレモナにも足を延ばし、現地の人々とも交流した若い人ならではのイタリヤ体験を、得意のスケッチと写真を見せながら語ってくれた。

第二部ミニ・コンサートにはソプラノ森美智子さんをお招きして「忘れな草」、「帰れソレント」等のイタリヤ民謡を沢山ご披露いただいた。『i-Cafe-Singers』も森さんと一緒に「フニクリフニクラ」等を歌わせていただいたが、フニクリが一八八〇年に敷設された登山電車(フニコラーレ)の営業不振を救った世界最初のコマーシャル・ソングだったとは！

二〇一四年十月にスタートした「i-Cafe-music@シェア奥沢」も今回で十二回目となり、「岩倉使節団の米欧回覧」を二順したので、次回七月十七日(日)は総集編として、一区切りつける予定。

**i-Cafe-lecture@日比谷図書文化館**

新入会員や未入会の方々、岩倉使節団の全貌を短期間で知っていただく主旨で、DVD「岩倉使節団の米欧回覧」全巻を三回に分けて、解説を交えて見ていただくことと企画した。

第一回四月二十六日アメリカ編、第二回五月三十一日英仏編。

お話は両日とも小野博正氏がまとめた岩倉使節団の人物像を中心にパワーポイントを使って語っていただいた。少人数だったが質疑応答で盛り上がった。初参加の「オブンガク堂cafe」という朗読コンサートを主宰する左藤さんと語り手の平野さんの若手二人から、「激動の『あの頃』が、資料と皆さんの熱っぽいお話から立ち上がって行くのが面白かった。次回はお酒も交えてもつとお話を聞かせて下さい。」とコメントがあった。わが意を得たりだった。第三回は六月二十八日ドイツ編の予定。

(岩崎 洋三)

**実記を読む会報告**

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@icom.home.ne.jp



■第二百二回

三月十日開催、第五巻カリホーニヤ州鉄道ノ記。第六巻ネヴァダ州及び「ユタ」部鉄道ノ記。第七巻ロッキーマountain鉄道ノ記。

一・北米大陸鉄道の旅

今回はサンフランシスコからシカゴまで中西部を横断する大陸鉄道の旅、三巻分をまとめ分担任して読み合う。使節団は一八七二年一月三十一日(旧暦十二月二十二日)から二十五日余り初めて米鉄道の旅をした。

『実記』のカリフォルニア・パシフィック鉄道はアメリカではセントラル・パシフィック(略称CP)、西のサクラメントを起点に建設を開始し、中西部ネブラスカ州オマハから建設を進めてきたユニオン・パシフィック鉄道(略称UP)と一八六九年にユタ州オグデン(一行途中下車)で結ばれ、東海岸と西海岸が貫通して間もない時期であった。使節一行は寝台車五両の特別列車、実記には寝台車の仕様等も紹介。因にCPの建設労働者は主に中国人移民が従事し、全長110km、UPはアイルランド移民、南北

戦争退役軍人などが従事し、全長1749km。鉄道建設は巨額の費用を要し、米国内のみならず海外からも多額の資金を集め証券取引所を發達させ、アメリカの急速な産業発展を促進した。

一行は州都サクラメントで下車・宿泊し州議事堂など見学、シエラネヴァダ山脈の最高地点(海拔2100m)を越えた後、ネヴァダ州、ユタ州、ワイオミング州、ネブラスカ州を通過しシカゴに着く。行程中、ロッキーマountain山が見舞われたため鉄道が不通となり、ソールトレイクに二十日も滞在を余儀なくされる。山あり溪谷ありトンネルあり川ありの景勝に富む旅であったが、夜間走行もあり常時快適とはいえなかった。

ネヴァダ州ではインディアンの集落にも出会う。『実記』はインディアンの来歴にふれるとともに聞き取りも記録、日本人による最初の貴重なインディアン・ルポを残す。なお、今回の報告では久米が参照した清国の文献「瀛環(えいかん)志略」、「海国図誌」の世界地図、目次等を紹介。

二・アメリカの政治・宗教・日系アメリカ人

今年には米大統領選挙の年。アメリカ史を繙き、フロンティア学説、インディアンの

強制移住政策、黒人奴隷にまつわる物語から歴史的に黒人に土地の自作が殆ど認められてこなかったこと、使節団訪米当時のグラント大統領の功罪、「アメリカ憲法は民主的か」(イエール大学名誉教授ロバート・ダール)によりアメリカの連邦制、大統領制、選挙人団制度等を学びアメリカ政治理解の一助とした。

また行程中ソールトレイクでモルモン教に接しており、現代アメリカの宗教状況を紹介。二〇〇八年度米人口のうちプロテスタント51%、カトリック24%、ユダヤ教1%、モルモン教1%、イスラム教0.5%、無宗教10%、その他である。さらにアメリカは移民国家。日本人は戦前、黄禍排斥の対象とされ日本生まれの一世に米国籍取得の道が開かれたのは一九五二年。二〇〇五年米国籍調査では日系アメリカ人は米総人口の0.5%、毎年約七千人がグリーン・カード(永住権)を取得し移民していることなど報告。

■第二百三回 (大森 東亜)

四月十四日開催。万葉集と岩倉使節団

『実記』を読んでみると、格調高き名文の裏に自然、人を愛する心と「和と寛容」の精神、万葉集で詠われている精神が流れていることを知っ



シカゴ市庁舎に電線が交錯している様子(『実記』)

た。万葉時代、大化の改新の頃、日本国創生の原点があり、遣隋使、遣唐使らによる中国文明、仏教思想の導入が行われた。同じように世界先端文明、産業革命後の技術を貪欲に取り入れたのが、明治期の米欧使節団の大きな業績である。

昔むした内宮の「さざれ石」の上に小さな松が生えていて、命のありがたさを味わうことができる。日本人古来の考え方「神仏和合」の精神が君が代には組み込まれている。興教大使の詞で「多くの宗教や宗派が他を排斥して争うのは、宗教の中心、根本に達していないからである」と説いている。日本人には霊峰富士山信仰とともに、古くからこの考えが浸透している。諸外国では宗教戦争が後を絶たず嘆かわしいことである。万葉集は時代と風土の中に残してくれた魂の音楽である。幕末の志士、明治維新を確立した

人々、立場は異にしたとはいえ、すべて共通した日本人の心情であろうと思う。このよな観点から万葉集と使節団を論評して紹介した。多くの万葉集を紹介、朗詠して、使節団の人物と対比して解説してみた。紙数の都合上、一例だけ紹介する。

一行がエヴァンストン駅に差し掛かったとき、グレイン河に雪解けの水が氾濫して、差し止めに合い、明治五年正月はソルトトレイクシティに滞在していた。十分な食事も取れなかったと想像する。シカゴに向かう窓外の景観が久米により、長文で見事に表記されているが、同じ心境と景観が万葉集で見事に表現されている。『実記』の文章を朗読するとともに、山部赤人の長歌巻3-322、有間皇子の詩巻1-14、2-142を説明して使節団の心情を論じ、信濃の東歌と坂本龍馬の姉、乙女の心情を結び付けて論じた。最後は伴家持巻20-4519「新しい年の始め 発春の今日降る雪のいや 重け吉事」で締めしてみた。まさに明治維新の幕開けにふさわしい詩である。話題提供後、新しいアイディアが生まれ、「万葉集から大化の改新と明治維新時代の心を探る」を執筆した。ご希望の方にはコピーをさしあげる。

(西井 易穂)

■第二百四回

五月十九日開催。第八章(シカゴ鉄道の旅)、第九章(シカゴからワシントンへ)、第十章(コロンビア特区総説)

使節団一行は、ネブラスカ州のオマハを発ち、ミズーリ川を渡りアイオワ州に入る。川を渡り、ミシシッピ川の長橋を渡ってイリノイ州に入り、シカゴに到着した。シカゴには一泊したのだが、前年二万戸も焼き、二日間も消えなかったシカゴ大火の被災地域を馬車で通り、水道システム、化学消防法、小学校、商品取引所等を視察した。使節団一行は、見舞金も渡している。

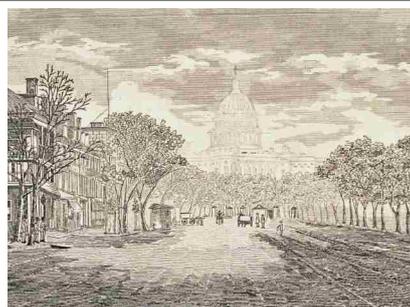
一行は、再びイースト・ステーションから列車で出発し、インディアナ州の北部を走り、オハイオ州を走りペンシルヴァニア州に入った。ここから大西洋平地となる。ペンシルヴァニア州西部の大都市、ピッツバーグ到着。盛んに製鉄工場を稼働し、オハイオ川によって、ミシシッピ河谷平地の各州に製品を送り出している。しかし、煤煙が空に立ちこめて夕日の光を遮り、夕焼けさえ黒ずんでいる。

フィラデルフィアを左に見ながら走り、デラウェア州ウィルミントン駅に着いた。

■第二百五回

六月二十四日開催、第十一、十二、十三章(ワシントン、上、中、下)

ワシントンに着いた一行はグラント大統領に謁見し、議事堂始め各施設を精力的に視察し政治の仕組み、大統領と閣僚の関係などを考察する。黒人学校を見学しつつ「容貌醜にして、猿の如し」と当時の黒人観を久米はそのまま吐露している。そしてリンカーンの南北戦争、奴隷解放に触れ「十余年を経ば黒人にも英才輩出すべし」と言っているが果たしてオバマを予見できたか。特許局では蒸気船(フルトン)や電気(フランクリン)等の科学史を、勸農寮(農務省)では領土の広がりや移民の増加を語っている。



ペンシルヴァニア・アヴェニュー。遠景は国会議事堂(『実記』)

さて、この三つの章に関連して、その後のアメリカについて以下のことを資料をたつき台にしてみんなで議論したい。

- 一、歴代大統領の評価。常にトップのリンカーンとブービー賞のグラントなど興味ふかい。Wブッシュとオバマの評価はどうなるかな!?
  - 二、フランクリンの生活規範十三か条。明治皇后も座右の銘としたという。前向きで実利的なアメリカ人気質がよく出ている。
  - 三、二十世紀米国キーパーソン列伝。(詳細、下記)
  - 四、映画「マイケル・ムーアの世界侵攻の勧め」と「芳野健二の大国主義か小国主義か」(所得、教育、福祉など)
- こんな議論をしている最中、「英国のEU離脱」の報が入った。岩倉たちの頃も、世界は激しく動いていたが、

今もまた、人々は「国とは？暮らしとは？」の解を求めて激しく動いているのだ。

＊キーパーソン列伝

一、大統領を超えた権力者…フーバー、マッカーシー。二、権力に抗したジャーナリスト…エド・マロー、クロンカイト。三、たった一人の反対票…ジャネット・ランキン、バーバラ・リー(どちらも女性)。四、日本への貢献…カーチス・ルメイ(？)、フルブライト(！)。五、古き良きアメリカを描く…ノーマン・ロックウェル、シユルツ(スヌーピー)。六、映画で戦争を告発…ダルトン・トランボ、オリバー・ストーン。七、敗れざる者…モハメッド・アリ、フオアマン。

Sir Ernest Satow,  
A Diplomat in Japan 輪読会  
担当幹事 岩崎洋三  
Tel 080-7959-4332  
iwasakiy31116@gmail.com



象二郎が来艦し、英水兵殺害事件についてやり

■第二十一回  
開、第二十二  
章 Tosa and  
Nagasaki  
一八六七年  
九月三日(慶  
応三年八月  
月)、土佐・  
須崎に着く。  
英艦に土佐藩  
の重役・後藤

とりする。土佐藩は犯人が藩の者でない主張、もし藩の者であれば判明次第報告するとした。(後日、一八六八年末に殺人犯が筑前藩の者と判明したとサトウは本章の中で記述している。)後藤はパークスに前藩主山内容堂との会見を申し入れるが、パークスはなぜかサトウのみ容堂に会いませ、自分は江戸に戻る。サトウは高知城を望む浦戸に案内され、川沿いの新築建物(開成館)で容堂と接見する。容堂と後藤は改めて藩の者が事件と関係していないこと、土佐藩への幕府の嫌疑は何の証拠もない濡れ衣だと強く主張する。その間、後藤たちは当時欧州で問題となっていたルクセンブルグ問題(仏国がルクセンブルグを蘭国から買収しようとしたが普国が反対し、同国は永世中立国となる。)に関連して憲法、議会の権能などサトウは問われる。

陽曆九月十二日、サトウは長崎に着く。長崎奉行の下、英水兵殺人事件の取調べがサトウと幕府派遣の平山図書守が立会い十日余り鋭意行われたが、犯人を特定するに至らず、サトウが嫌疑した土佐人の逮捕には応じられないとの文書回答が長崎奉行からなされる。長崎滞在中、サトウは年来の友人、伊藤俊輔のほか

桂小五郎と初めて会い、内外の政治外交問題を論じあう。薩摩藩の新納刑部と四回も会い、同藩の動静や西郷のこころ、浦上でカソリック教徒が大勢逮捕されたことなど聞いたほか、久留米藩医などと政治問題を論じる一方、肥後藩主の弟細川良之助から英艦隊司令長官の招聘や水兵事件のことなど尋ねられたが、肥後藩が薩摩に組していなかったこと、適当に応接したことなどを記す。十月十六日深夜横浜に帰る。

なお、このサトウの土佐・長崎行中、後藤象二郎は京都に赴き小松・西郷に大政奉還建議を力説したのに対し西郷・大久保は長州藩士と討幕挙兵を密議し、十月十七日には薩摩、長州、芸州の三藩連盟を成立させている。

(大森 東亜)

■第二十二回  
三月十六日開催、第二十三章「將軍政治の没落」。

サトウは、初めて品川高台に一人住まいの身となり、優雅な生活を満喫した。場所は東禅寺のイギリス公使館近くの江戸湾を見下ろす八百坪の敷地で、武士の隠居用お屋敷であった。公的な仕事はハリー卿通訳の他公文書の翻訳で多忙であったが、日本語の勉強、親しい日本人との交際など充実した毎日であった。

しかし、日本の政治情勢は緊迫し、激動の変転時期を迎えていた。慶応三年十月十四日慶喜が大政を朝廷に奉還する奏請がされ、小笠原壱岐守長行外国事務総裁が内々でパークスに「今後政治は有力大名の合議制になり、決済は天皇の認可制となる」と告げた。討幕の密勅が薩長両藩に交付され、慶喜が將軍職を辞した。サトウにも続々と緊迫した京都・大阪の情勢が届き、今後の政局としては、内戦の勃発を予感し、「終わりの始まりが開始された。」との感を深くした。

一方、パークスは、現政治情勢は日本の進むべき方向に沿った「快挙」と考えていた。その後、パークス以下英国公使館の主要要員は五十名の兵士とともに大坂に駐留した。大坂の街では群衆が「エエジャナイカ！」の乱舞で奇妙な祭りが繰り広げられ、サトウ達は外出するたびにその群衆に出会った。大政奉還という時代の変革期で世直し運動の様相とも考えられた。薩摩の西郷や吉井がサトウに薩長連合が成立し、薩摩藩主が藩兵三千とともに上京、一方徳川將軍側は京都近辺に約一万の兵を擁していることや坂本龍馬が暗殺されたことなどの重要な情報を伝えてくれた。一八六七年大晦日にサトウは年俸七百ポンドの日本語書記官に昇進した。

(水谷 剛)

■第二十三回  
四月二十日開催、第二十四章 Outbreak of Civil War

表題は「内乱の勃発」とさされているが、新政府軍と徳川軍がついに銚子を交える鳥羽・伏見の戦い(1868.1.27~30)を明治元年(慶応4.1.3~6)を真の勃発と捉えるならば、この章の内容は、王政復古の大号令の宣言からこの内乱勃発直前までの、1868.1.1(慶応3.12.7)から1868.1.23(同年1.2.29)の期間における、政局の流れと合戦に備える両派の動きを述べたものである。

岩倉らは、朝廷の力を借りて辞官納地を要求して幕府側慶喜を追い詰めるが、肥後藩、筑前藩、阿波藩などの巻き返しがあり、また慶喜の王政復古の大号令の撤回要求を認めた朝廷の告諭、即ち徳川幕府体制に基づく大政委任の継続の事実上の承認などによって、形勢は討幕派に不利に傾いてゆく。

一方、西郷の挑発工作とされる薩摩藩の過激な行動に対し、これに反応した徳川方による1868.1.17(慶応3.12.23)の薩摩屋敷の焼き討ちなどの結果、討幕の理由づけが固まり、ついに慶喜は朝敵の汚名を着るようになる。こうして

合戦に至る機運は次第に高まってゆく。ここに至って慶喜も意を決し、1868.1.24(慶応二年)に「討薩の表」を作成し、新政府に対して宣戦を布告した。

またこの章では、サトウが遠藤、石川利政(河内守 外国奉行)から得た情報は、当然ながら発生時点より遅れている。このためサトウの記述の流れは、情報の入手時点に依りて、時系列的な順序に沿わないところがある。これは慶喜のとする態度に、すでに「朝廷の論告」をすでに受け取っているのか否かを判断しにくい記述などに見ることができ

(市川 三世史)

■第二十四回

五月十一日開催、CHAPTER XXV HOSTILITIES BEGUN AT FUSHIMI 「伏見の戦争」。

伏見の戦(1868.1.27~30)の混乱の中、大坂から脱出し、兵庫に辿り着くまでの英国公使館の対応について述べられている。一月二十七日、京都の方角に見えた大火災から、伏見での慶喜の部隊と薩摩及び同盟諸国の部隊との戦闘を察知。二十八日、ハリイ卿は永井玄蕃頭に面会し、徳川の諸部隊が伏見から退却したとの説明を聞く。三十日、徳川の形勢が有利ではないと評価。大坂と伏見の中間の方

角に大火災が起きたのを目撃すると、戦闘が大坂に接近していると判断。ハリイ卿は出来るだけ多くの船を雇って公文書類を英国艦隊に移すことを決定し、書類移送後は冷静に事態の推移を見守ることとした。三十一日、公使館一行は外国人居留地に向けて出発。二月一日、サトウが大坂城の状況を見に行くと、慶喜は城から立ち退いていた。ハリイ卿自身は兵庫に行くことを決定。サトウは大坂残留を志願。二月二日、大坂城炎上。救助艦に乗って居留地を出発したサトウらと、彼らが大坂から救助するために汽船に乗って来たハリイ卿が合流。公文書類を含む全物品を雇った船に積み込む。二月三日、英国公使館一行は無事、兵庫に上陸。

第二十四章では、一月八日に慶喜がハリイ卿に接見した際に、権力を失い変わり果てた姿の慶喜に同情の念を禁じ得なかつたと述べたサトウであるが、第二十五章では、自分には外国事務管理の任務があると外国代表に述べておきながら、実際には公使館の保護が出来なくなつたと通告しただけで逃走した慶喜の行為は不面目であると断じている。

(樫原 知子)

歴史部会報告

担当幹事 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■木戸孝允のめざしたこの国のかたち―憲法制定への流れ(芳野健二氏)

芳野氏は、以前に「木戸孝允・悩める国家プランナー」の講演があり、今回は、この国の中心となった。

岩倉使節団として訪米中から、木戸は精力的に各国の憲法研究に費やした。米国憲法は久米邦武や畠山義成と、英国憲法は安川繁成と、プロシア憲法は青木周蔵と研究し、独・法学者グナイストにも会った。

帰国後の明治六年七月に、いち早く『正規典則議』(憲法制定の意見書)を提出し、憲法の制定が国家の興亡を左右すると主張、立憲政治を基礎に、中央政権国家の樹立を主導した。明治初年の『五箇条の御誓文』も起草に関与した。大久保利通も、明治六年十一月に『立憲政体に対する意見書』を出し、二人の提案が明治八年の『立憲政体の樹立の詔書』に繋がる。岩倉具視も意見書で「英国の国王は国政を統治していない。プロシア憲法は国王が国政を治め、行政権は議会と分担する

が国王が握り、他に譲渡せず、大臣以下勅任諸官の任命権も持つので、これが日本には相応しい」とした。

この考えが、結局、明治十四年の政変に繋がり、伊藤博文の欧州憲法調査となって、明治二十二年の大日本帝国憲法の完成に結びつく。この前後に、元老院の「日本国憲法」の議論を含めて、植木枝盛の『日本国憲法』や千葉卓三郎の『五日市憲法』などの私擬憲法が九十近く発表されて、百家争鳴の時代であったが、明治二十年の保安条例ですべて禁じられた。

そんな憲法制定に至る流れを丁寧に通った。ベルツは日記で明治憲法発布を「内容も知らずにお祝い気分」「ドイツ憲法に酷似」と揶揄している。戦後憲法については、押し付け憲法と言われるが、植木、千葉の私擬憲法系の伏流水である鈴木安蔵らの日本国憲法研究会案がベースになつてGHQ案があり、戦争放棄も、幣原首相からマツカiserへ提案としたものとの説を紹介し、世界中の平和憲法を披露された。

(文責) 小野 博正

■岩倉使節団同行五人の女子留学生(畠山朔男氏)

戊辰戦争終結から二年後の明治四年七月の廃藩置県などで、まだ日本全国に不満武士

達が燻っていたその十一月、岩倉使節団に同行して幼い五人の女子が海を渡った。国の費用で十年間という長い期間に亘り女子に米国で教育をさせようとした本当の理由は何か、また誰がその様な企画をしたのか、誰しもが疑問に思うことである。

これ等の解を求めて関連資料を読み進めると二人の人物に行き着く。一人は函館戦争を勝利に導いた功として明治三年に北海道開拓使次官に任命された黒田清隆、もう一人は明治三年アメリカ駐在の初代「少弁務使」として新政府に任命された森有礼である。この二人が西洋での女性の存在が日本と異なる事に強い印象を受け、西洋では男女の差別無く、女性は尊重され社会的地位が高く、教養に富み、社交場でも堂々としている姿に感動する。そして日本の新しい国家建設には女性の役割変革が必要であると、二人は意気投合し、変革の為には机上の教育ではなく、実際に西洋の土地に住みついて身をもって体験する必要があるとの結論に達する。

黒田清隆は明治四年六月米欧視察から帰国し、十月に東久世開拓使長官と連名で女子留学に関する建議書を成院に提出、承認される。五人の女子留学生の選考についての経

緯は省略するが、結論として次の五人が留学生に決まる。年齢順に上田梯子(十六歳)、吉益亮子(十四歳)、山川捨松(十一歳)、永井繁子(十歳)、津田梅子(七歳)である。

これ等の幼い女子が自分の意思で十年もの長期留学を決断したわけではない事は明らかである。実は女子留学生についての歴史を学ぶ醍醐味は女子達の育った家庭環境、そして女子留学の応募を決めたと思われる親達についての掘り起こしにある。五人の女子の親達の共通点は幕臣か賊軍であること、もう一つは海外渡航の経験を持つ海外通であったことである。上田梯子と吉益亮子の二人は体調を崩し、一年足らずで帰国を余儀無くされる。山川捨松はコネチカット州ニューヘイヴンのベイコン牧師宅で六年間、中高校時代を過ごし、明治十一年にニューヨーク州ポキプシーのヴァッサーカレッジ普通学科に入学、明治十五年卒業し帰国。永井繁子はニューヘイヴンの隣町、フェアヘイヴンのアボット牧師宅で、過ごし捨松と同じく明治十一年にヴァッサーカレッジの芸術学科に入学し、捨松、梅子より一年早い、明治十四年に帰国。津田梅子は当初より、ワシントン州ジョージタウンの

ランマン宅で過ごし明治十五年アーチャー・インステイチュート(高校)を卒業し、山川捨松と共に明治十五年帰国。

彼女達の過ごした十年、一年間はアメリカの中でもハイレベルな知識階級にあつて、キリスト教をベースとした厳格さの中にも、慈愛に満ち溢れた生活環境であつたといふことはその後の彼女達のソフィステイケートな人格形成に重大なる影響を及ぼした事を指摘しておきたい。彼女達が帰国した時は、アメリカ留学に送り出した責任省庁の開拓使は既に廃庁となり、管轄が文部省に移っていた。そして彼女達の行く先は：

■明治民法の制定の経緯と特徴、および現在に繋がる意味(根岸謙氏)

明治政府は、日米修好通商条約をはじめとする西欧各国との間の不平等条約を改正すべく、西洋型司法制度の整備に取り組むことになり、その事業の一つとして、民法典の編纂が行われた。

幕府はオランダから様々なものを輸入しており、オランダ民法の知識も輸入されていた。しかし、オランダ民法の母法はフランス(以下「仏」)民法であることがわかると仏法に注目が集まるよ

うになり、明治時代に入ると、民法編纂のトップである各司法卿は仏法を模倣・参考にした民法草案を作成。

初代司法卿江藤新平は、徴兵制実施の時期とあいまって、富国強兵の根源として民法を捉え、仏民法の「身分証書」の部分そのまま翻訳しただけの「民法仮法則」という民法草案を作成したが、廃案となつてしまふ。

第二代司法卿大木喬任は仏民法に倣い、相続や親族、契約といったものを規定しないから、生産や夫婦関係はうまくいかず、物資の融通も停滞すると考え、仏民法の大半を翻訳して、「司法省草案」という民法草案を作成。

しかし、これも廃案となり、第三代司法卿山田顕義(岩倉使節団兵部省理事官)のもとで修正されていく。山田は、単に仏民法を翻訳するのではなく、日本の風土・慣習にあつた日本独自の民法を作るべきであると主張し、例えば仏民法にはない戸主制度を規定し、また、民法典全体の構成も仏民法とは異なる、日本独自の構成にした「旧民法(修正民法)」を作る。ところが、法学会や穂積八束らから施行延期を唱えられ、内閣はドイツ民法草案を基礎としつつ、日本の慣習等を取り入れた「明治民法」を作る

ことになる。これが現在の民法である。

現在では、日本民法はアジア各国に輸出されるにまで至り、また、二〇〇六年から民法の大規模な改正作業が開始されたが、民法施行から百年の間に形成された民法理論を大きく変更することはできず、小規模改正にとどまつた。(根岸謙)

■西洋化とその不満(ウィリアム・スティール氏)

五月十六日開催、二十六名参加。

ウィリアム・スティール C U元教授(現非常勤講師)には『もう一つの近代』(ペリカン社、一八八七年)の著書もあり、負け組(幕府)、庶民(戯作者、瓦版、浮世絵)など、もう一つの視点から近代を問い直す。例えば、ペリーの黒船来襲は、容赦のない近代化でもあり、日本人は開国か鎖国か、新しい技術(汽車、蒸気船、電信)を受け入れるか排除するかなどの選択を迫られた。吉田松陰が西洋文明への強烈な好奇心から、西洋化で一等国にしたいという超ナショナリズムを生んで、一君万民の倒幕のエネルギーとなった。一方、横井小楠は天下は公のもので、一君万民制でないアメリカのような公議制度と貿易により万国平和を四海に広めるべきと

忘れた思想家・佐田介石『馬鹿の番付』は、何でも西洋化を讃美する文明開化を笑いのめし、伝統文化を捨て去る愚を説いた反近代的警戒であつた。戯作者・万亭忠賀も、福澤諭吉の和魂洋才『学問のすすめ』に対峙して、『学問の雀』(すすめのパロディー)で、人の上に人を作る官僚主義、官尊民卑を批判して、東洋と西洋を公平に比較すべきと説いた。これは、その後の福沢諭吉の言説にも影響を与えた。然し、佐田介石も万亭忠賀も今は忘れられている。

演題の「西洋化とその不満」は、じつはフロイトの言葉に由来、フロイトは、「文明は人間を阻害し、精神病も生む」と警告した。文明は麻疹のようなもの、罹ると死ぬかもしれないが免疫化もする。文明とは単純な進歩ではない。明治以降の上からの近代化は富国強兵に向かったが、



ウィリアム・スティール氏 (5月16日)

考えた。それは五箇条の御誓文の趣旨でもある。

忘れた思想家・佐田介石『馬鹿の番付』は、何でも西洋化を讃美する文明開化を笑いのめし、伝統文化を捨て去る愚を説いた反近代的警戒であつた。戯作者・万亭忠賀も、福澤諭吉の和魂洋才『学問のすすめ』に対峙して、『学問の雀』(すすめのパロディー)で、人の上に人を作る官僚主義、官尊民卑を批判して、東洋と西洋を公平に比較すべきと説いた。これは、その後の福沢諭吉の言説にも影響を与えた。然し、佐田介石も万亭忠賀も今は忘れられている。

### グローバルジャパン研究会報告

担当幹事 畠山 朔男

[hatakeyama@joy.hi-ho.ne.jp](mailto:hatakeyama@joy.hi-ho.ne.jp)



もう一つの近代化を、蒸気車の人力車を挙げて説明された。庶民のほとんどが乗れない蒸気車に、大金をつぎ込んだが、日本人の発明した人力車は庶民の足として、明治八年には東京だけで十万台まで普及し、その後アジア各地に伝播した。日本発の近代化だが、今は誰もこれを語らない。西洋化、近代化、近代は夫々違ったニュアンスを持つ言葉。グローバル化の現代こそ、近代化、西洋化の意味をもう一度見直すべきとの指摘。

(文責) 小野 博正

■日本が目指す社会像 — 大平構想を踏まえて — (福川伸次氏)

二月十三日開催。福川氏は東洋大学理事長、元経済産業省事務次官。

日本社会の強み(自助共助の精神、異文化への寛容性、自己陶冶の努力、和の尊重、自然との共生)を活かし、人間価値主導の経済社会の構築に向けて、「日本から世界を変えよう」との講演。清華大学の百周年記念シンポジウムに

出たが、目標は、同大学出身のアメリカ大統領を出すこと。中国、シンガポール、韓国のイノベーション力はすごい。やはり、教育が重要。大平氏は、「SIMPLE LIFE, HIGH THINKING」と言っていた。いつも、時代の変化をどう読み取るか、社会の新たな仕組みはどうあるべきかを考えておられた。

残念ながら、日本の停滞はまだ続いている。大平構想のエッセンスは、「各個人が能力を最大限に発揮すること」。特に、グローバル社会に向けて、日本の発信力を高めるべきなど、示唆に富むコメントを数多くいただいた。

(文責) 塚本 弘

■サイエンスとは？生命はなぜ不思議なのか？そして文明は何処に行く？(和田昭允氏)

和田氏は、生物物理学者で理学博士、東京大学名誉教授、理化学研究所名誉研究員、横浜サイエンスフロンティア高等学校常任スパーアドバイザー等、その他多くの役職を兼務。その上、木戸孝允、山尾庸三の曾孫、木戸幸一の甥、都留重人の義弟、西園寺公望は母方の大伯父にあたるという、眩しいばかりの家系のご出身である。本セミナー第二弾として当会でも日ごろ殆ど取り上げる事が無かった「サイエンス」について、やさしく、映像を交えながらお話いただいた。

「智慧と知識」の関係について、世の中には知識が溢れていて外から入ってくる知識を自分の頭で考え繋げると自分の智慧になる。月の夜にりんごが木から落ちるのを見てあの万有引力の法則を思いつくニュートンの話を例に取り上げられ、月が落ちない事は誰でもが知っている知識であり、誰もが落ちるのはこれも誰でもが知っている知識である、これ等知識を繋ぎ合わせてあの大発見を導き出したのはニュートンの智慧だけである。「智慧は自分の頭で生むものだ。どんなに素晴らしい智慧も、読んだり聴いたりしたものとは異なる知識に過ぎない。知識と智慧のバランスが大事である」と。

かけ離れた物と物を繋げると新しい事が出てくる、和田氏が勉強始めたころは「生物学」と「物理学」は別々の物であった、この二つの学問の分野が繋がって全く新しい「生物物理学」の分野が確立された。生物学は対象が生物であり、物理学は自然界のDataの得やすい天文学などから始まって、Dataの最も得にくい「生命」も今や物理計測が発達して電子信号に替えられ物理学の対象となった「生命は不思議」ではなくな

た。お話はいよいよサイエンスとは、生命の起源について進む。物理学を中心にしたサイエンスの物の考え方は難しいものではない、森羅万象の中で自分が考えたい、知りたいと思った物を対象に切り出して、どういう要素があるか丹念に調べ上げ、それぞれの要素間の相互作用によって全体を理解する。全体を理解する事によって各要素がどういう働きをするか知る、これがサイエンスの全てである。(要素還元主義)

「生命の世界」何故生命は不思議なのか？ 生命の起源は四十億年前といわれ、誕生時の生命は自分と似たものを作る(自己増殖)分子集団だった。幸い少しずつ違うものを作る性質(突然変異)を持つていたために環境に適したものが生き残り(自然選択)今日に至る。(和田氏著「生命とは？物質か！」より)

(文責) 畠山 朔男

ゲノムやDNAについてはチンプンジューと人の違いや、「オトシブミ」という甲虫産卵時の動画は大変興味深かった。その他、「相関と因果」「暗黙知と形式知」などについてたくさん興味あるお話を頂いた。

末筆になりますが和田先生の最大の功績は一九八三年ヒトの遺伝情報(ゲノム)はDNA

という「分子原稿用紙」に四種の原子文字が三十億個並んでいる文章を日本が誇るハイテク技術で高速度オートメーション解読しようと科学専門誌に提唱、掲載した。二十一世紀の最重要課題「生命科学」のナンバードワンになるという世界戦略であった。本件には紆余曲折があり、政府の無理難題などで米国に一步遅れを取ったが、今日このゲノム解読で世界に誇れる地位に位置している事は和田氏の卓越した先見性と地道な努力の賜物である事は言うまでもない。

(文責) 畠山 朔男

■十四歳でホームレス問題に出会って起業して(NPO法人 Homeoor 川口加奈氏)

五月十四日開催。

豊かなはずの日本の路上で、なぜ凍死や餓死する人がいるのか？そんな疑問から、ホームレス状態を生み出さない日本を目指してさまざまな事業を行うNPO法人 Homeoor (ホームドア)の取り組みを研究会の皆様にご話させていた

だいた。

◇ホームレスの特技を活かす「シェアサイクル事業」 Homeoorのメインの取り組みである「HUBehari」(ハブチャリ)は大阪市内に展開する複数の拠点(一日利用は八拠点、月額利用は十八拠点)で、一時間百円から自転車を



川口加奈氏  
(5月14日G J研究会)

レンタルできるサービス。どの拠点で借りてもどこで返してもいい、レンタサイクルの進化版だ。このHUBehariの運営を担うのがホームレスや生活保護受給者たちで、のべ百七十名(行政委託の自転車啓発指導員含む)が就労した。空き缶回収などで自転車に何キロもの荷物を積んで走るホームレスの人たちにとって、自転車修理はほぼ共通した特技。その特技を活かして、貸自転車の修理や整備、一部拠点での貸出業務などを担ってもらっている。

HUBehariはホームレスの就労支援と同時に、放置自転車を緩和するシェアサイクルを広め、大阪で特に深刻なこの二つの問題を解決する取組みだ。利用者が便利さを求めて自転車借りると、それがホームレス支援につながる。ホームレスの人たちにとって自分たちの仕事で自転車問題の解決に役立つことで、やりがいを持って働くことができる。

◇きっかけは、路上死。そして中高生の野宿者襲撃。HomeDoorの設立は、二〇一〇年四月。「ホームレス状態を生み出さない日本の社会構造をつくる」ことが目的だったが、設立には代表である私の体験が大きかった。私は、「豊かな日本で、なぜホームレスになる人がいるのか」との疑問から、十四歳の時に釜ヶ崎の炊き出しに参加した。そこで日本の路上で凍死や餓死する人がいることを知るが、ホームレス問題を学ぶ中で何より驚いたのは自分と同世代の中高生が野宿者を襲撃する事件を起こしていることだった。「ホームレスは社会のごみ。俺たちはごみ掃除をしてあげている……」。そんな言葉にショックを受け、ホームレスと少年たちの最悪の出会いを食い止めたいと、学校での講演活動などを通じてホームレス問題に関わり始めたが、状況は変わらなかった。

そうした中で、啓発活動や炊き出しなどの対症処療法的な活動だけではなく、問題の根本的な解決のためには、ホームレス状態を生み出さない社会こそが求められているとの思いに至り、十九歳の時にHomeDoorを立ち上げた。現在は、路上からの「出口づくり」、ホームレスにそもそも

ならず済む「人口封じ」、そして「啓発活動」の、三つを柱に九つの事業を展開している。(川口加奈)

### 関西支部報告

担当幹事 難波 康熙



[namba@jttk.zaq.ne.jp](mailto:namba@jttk.zaq.ne.jp)

#### ■第八十八回

二月十七日開催、参加五名。第三編第四十五卷(章) 巴利府の記四

使節団訪問の直近に起きた普仏戦争でプロシヤがフランスに勝利したこと、明治政府はプロシヤに傾斜するようになり、その結果としてのプロシヤ(独逸)の勝利が、明治日本に新しい憲法を通じて「国のかたち」に大きな影響を持つことになる。それは明治日本の飛躍的発展の礎になったが、やがて昭和の太平洋戦争への路へと繋がる遠因ともなった。即ち、結果的に日本を破滅に導いた統帥権干犯問題の根源が明治憲法にあるようにも述べたが、伊藤博文が心血を注いだ明治憲法の制定の意図は決してそのようなものではなかったこと、また明治憲法の精神の根源は突き詰めれば、今輪読の対象としているフランスで起きた革命にあったことを、今

回の例会で確認した。

■第八十九回  
三月二十三日開催、参加四名。フランス編を最終四十八巻まで一気に読み進む。

フランスの生産されたものは精緻でデザインに優れるなど、極めて付加価値が高いものが多い。このようなことから、みなフランスを最上の文明国と絶賛している。国の統治についても同様で、英国などは富強ではあるけれど、国内政治が庶民にいたるまでよく配慮し、個人の気質が洗練されているという点ではフランスには及ばないというのである。(四十六巻)：と『実記』にはフランスを、断片的な表現ではあるが、大いに賞賛している。

しかしながら、もう少し注意深くフランスについて見ると、不思議さというより矛盾点があるように思える。この本質的とも言えるフランスの矛盾点は『実記』の当時であつても、今日我々が感じるのと同じであつたと考える。具体的には、フランスは「自由、平等」を至上のものとしながら、実態はエリート官僚主導で中央集権的であり、一般の国民はエリートなどとの権力格差に対して極めて寛大であり、許容性が高い。つまり、エリートに対して国家指導者として一般大衆がそれを

受け入れ、期待していることにある。個の尊重を叫びながら、英雄を願望し、英雄に追従的であるでもある。

■第九十回  
四月二十七日開催、参加四名。第三編第四十九巻「白耳義(ベルギー)国」

ベルギーの国土は三万平方キロ、つまり日本の1/3に過ぎない小国であるが、二つの言語地域から成っている。ベルギーが民族、言語の合成された国にも拘わらず、「一つの国としての存在する理由と、その必然性」を不思議に思い、考えざるを得ない。

『実記』では、ベルギーは小国ながら仏独英の欧州列強に囲まれ、それらの国に伍して頑張っているためか、明治揺籃期の日本としては関心が高いのである。多くの紙面を当てている。そして、ベルギーが大國フランスとオランダの間にあつて一國として成立し、さらに今日まで独立を保っている背景を歴史的に観ようとは試みている。

ベルギーの言語、宗教、南北経済格差が絡む国内対立と、欧州列強に囲まれた状況の中で中立政策を選択せざるを得なかった事情は、日本人には実感することは難しいが、多くの示唆に富む。

(難波 康熙)

特定非営利活動法人  
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。  
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。  
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」事務局担当 古俣美樹  
〒190-0001  
東京都立川市若葉町 4-25-1-30-102  
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp  
TEL/FAX 042-537-8869

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。  
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込(振込)をご利用ください。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等  
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

\*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2016年 7月～9月の予定です

☆本セミナー

- 「日本近代における『大正時代』の意義」(近代史研究会)  
講師：成田龍一・日本女子大教授  
日時：7月12日(火) 13:00～17:00
  - 「近代日本におけるナショナリズムとアジア主義」(近代史研究会)  
講師：中島岳志・東京工業大学教授  
日時：9月27日(火) 13:00～16:00
  - 「The Charms of Japan ～言祝ぐ日本～」(グローバルジャパン研究会)  
講師：Dr. Peter MacMillan/ 芸術家・翻訳者・茶人  
日時：7月16日(土) 13:30～16:30
  - 「世界の中の日本の未来」(グローバルジャパン研究会)  
講師：五百旗頭真・国立熊本大学理事長  
日時：7月30日(土) 13:30～16:30
- \*本セミナーの会場は国際文化会館(会費1,000円)

☆実記を読む会

- 日時：7月22日(金) 14:00～ 「第14, 15巻」 岩崎氏  
9月23日(金) 14:00～ 「第16, 17巻」
- 会場：国際文化会館(会費1,000円)

☆Sir Ernest Satow, A Diplomat in Japan 輪読会

- 日時：7月13日(水) 14:00～ Ch. 27 大森氏  
9月21日(水) 14:00～ Ch. 28, 29 赤間氏
- 会場：日比谷図書文化館(会費1,000円)

☆歴史部会

\*7月19日 シンポジウム発表者による勉強会・事前打合

☆近代史研究会

- 日時：7月28日(木) 13:00～17:00  
「満州国と2.26事件」  
(古海建一氏、香田忠雄氏)
- 会場：国際文化会館(会費1,000円)

☆i-café-music @シェア奥沢

- 日時：7月17日(日) 14:00～17:00  
シェア奥沢でのi-Café-musicシリーズ“音楽で巡る『岩倉使節団の米欧回覧』”総集編  
第1部 映像とお話、第2部 ミニ・コンサート
- 会場：シェア奥沢 03-6421-2118  
東急東横線・自由が丘駅から徒歩5分
- 会費：2,500円(軽食・飲物付)

編集後記

◇前号に続き増ページ(十二ページ)の発刊となります。昨年度の活動報告(三頁)掲載のほか、活発な活動が連続増ページの大きな要因です。まず、歴史部会(A)、近代史研究会(B)そしてグローバルジャパン研究会(C)が、通常の活動に加えて二十周年記念事業に備えて外部講師を含めたセミナーが活発に開催されてきました。また、着実に部会を重ねてきた実記を読む会、英訳実記を読む会(サトウ輪読会)や関西支部の活動を土台にして、新会員増に大いに貢献しているi-caféシリーズが年間十回のペースで開催されていることも特筆に値します。

◇七月、八月は、十二月のグランドシンポジウムに向けた本セミナーの開催や実行委員会の合宿などの日程が組まれていた記念事業の真つただ中にあり、全会員に呼びかける夏の全体例会(講演会)はありません。今号の報告・記事の一つ一つが、記念事業を組み上げていくプロセスとご理解ください。

◇ホームページ(会員のページ)が村井さんの尽力で刷新されました。また、ホームページ全体のリニューアルには至りませんが、確実に歩を進めています。

(N)